



ヤツターキングがダムへ潜入した和たちは、
うかつにも変な人達に捕まってしまった。

少し離れたところでドロンポーとキンズラーも捕まっていたみたい……。

「このおーはなせのー！ 私たちはヤツターマン様に会いに行くんだけあー！」

ぐい

「侵入者を捕らえた。いつも通り男は独房へ放り込んでおけ。
がキの方は……」

「くのおー……」

和はいたばたと抵抗するが屈強な男の人たちはビクともしない。

「騒がしいがキだな、少し黙れ」

そう男の人が言った瞬間、

衝撃が訪れたのは数瞬後のことだった。

んん

ニナ

ニナ

「おっ………？」

私のお腹に男の人の大きな拳がメリメリと音をたてて突き刺さっている。



数分間続いたソレは私の抵抗を収めるには十分すぎた。
意識が激しく混濁して呼吸がうまくいかない……。

「ぶえええっ……ニヒユウ……はっ、はっ……」

はっ

ダッ

ダッ

はっ

ちよるる……

「……そのへんにしておけ。内蔵が傷ついても修復が面倒だ。
大事な商品なんだからな」

「ちっ……」

薄れていく意識の中で……
私たちはどうなってしまっただろう、という不安が
頭のなかをぐるぐる回ると駆け巡っていた……。

ヤッターキングダムでは捕らえられた女性犯罪者の調教を行う。
ヒトとしての尊厳の破壊から始めるのだ。

「では自慰を始めるの。思いつきりやるんだ、いいな？」

「え……公園、で……ん……」

「うるさいの。早く始めないとお仲間にも罰を与えるぞ？」

「は、はい……」

「ふう、すっごくいい人に見られてる……」

「……ここで折れちゃダメ！私はやってやるんだ！」

取り巻く人たちの声が聞こえてくる。

「なんであのおねーちゃん裸なの?」

「悪いことをするとああなるのよ。よく見てなさい」

んんん

どきん

どきん

ハッ♡

10

「……悪いことしてるのはヤッターマン様たちなのよ! 恥ずかしいし、早く済ませちゃおう……」

「あゝ……………ふっ」

んっ

んっ

ぬちゅん

ぬちゅん

そして私は自分のマソコをクチュクチュといじり始めた。

家で隠れてしていた時のように自分が一番感じるところを積極的にぐちゅ、と刺激していく。



気持ちよくなってきたら、
周りの視線が気にならなくなってくる。

へむしろ興奮してきちゃう……♡どうしてえ♡

あーん

あーん

ぬちゅ

ぬちゅ

ぬちゅ

ぬちゅ

「くうん♡あああああ♡ん♡はあはあはあはあ♡」

自然とマソコを前後する指のペースも加速していく。
もうドロドロで指がふやけてしまっそうだ。

「あ♡♡イク♡♡イク♡♡ちやうよお♡♡♡」

「おおおおおの.....♡♡♡ふぁ.....♡♡♡」

「.....ほへえ♡こんななのせったいおかしーいよお.....♡
へおたし、へんたいさんだったのがなあ.....♡♡♡」

♡♡♡
♡♡♡
♡♡♡

♡♡♡

♡♡♡

♡♡♡

捕らえた犯罪者には事前に薬を投与してある。

それを知らずに異常な状況で絶頂する事によって、
自分自身に対して疑問を抱かせるのだ。

むあぁ...♡

もちろん調教はこれで終わりではない。



ここでは野外調教の他に、三角木馬による調教も施していく。
囚人たちにより自分の立場を理解させるためでもある。

「ふう……ふう……」

「これ……自分の体重でおまたにじんじんくるっ……」

「今から一体……?」

「……」

「……」

「……」

「……」

全身から汗がどっと噴き出してくる。
心臓がキリキリと痛みを訴えてくる。

「……呼吸を整えて……ま、負けちゃだめ……」



「あああああっつああああああっつー！！」

おん

スス...

カタカタ

「あっ！あづいっつー！！あつーいよおー！！」

鞭でうたれた傷に蟻がジクジクと染みていく。痛みで敏感になった肌はその刺激は強すぎた。



30分後

「かあ……んお……ほおおの……」

ヒン

木馬に跨がり、気絶したまま全身から汁を止めどなく流す……

これくらいのことは調教過程では日常茶飯事である。

ヤッターキングダム最新技術を駆使すれば
火傷や傷跡などすぐに治療可能だ。

市場に出品する際に身体に傷が残っていることはない。

……で心が壊れるしまうことが少なくないが……。

ちよろろ……

それはそれで需要があるのだ。

ここでは後々のために囚人の穴を慣らしておくための訓練を行う。

調教はバランスが肝心だ。
あまり手厳しいことばかりで自殺されたりするのでは元も子もない。

どきッ

「これが男の人の……おちんちん？」

「すっごく大きいよ……こんなモノが私の中に入ってきちゃうの……」

＃
＃
！



「んっ！おオっ」

んっ

んっ
んっ

「はーっ♡はーっ♡」

「えっ……もうひとつおちんちん……」

はあ♡

はあ♡

私のアソコは既におちんちんで埋まってる。一体どうするつもりなのだろう……？

アッ……

##



ニニニ

ゴゴゴゴゴゴ

グニッ

「おっ……♡くっ♡……♡♡」

熱い奔流が私の意識を真の白に染め上げていく。
出された精液は収まりきらず、どばどば勢いよく私の穴からこぼれ落ちていく。

はぁ♡

ムンムン♡

んんん♡

んんん♡

んんん♡

しばらくの間、何度も何度も精液を注がれ続けた……。

クッ
クッ
クッ
♡

クッ
クッ
クッ
♡



ある程度調教が終わった囚人を奴隷娼館へ売り渡す。
当然奴隷に給料などは
存在しないので双方へメリットがあるというわけだ。

「新入りの子かい……これまた可愛い子が入ってきたなあ」
「ところで君のその格好は一体なんなの……？」

「……私は義賊ドロンドロンの末裔だぞ……」

「貴方たちみたいなおい大人は
かたっぱしからデコピンしてやるんだ！」

んっ♡

「ふっん……今回はそういうシチュね……そらあ！」



「おっぴんおっぴん」

「ちんぽ入れられてヨがる義賊って……ッ先祖さまも泣いてるよ」

「い、今のはびっくりしただけっ」

「おちんちんなんかへでもないんだからっ」

「おっぴん」

「おっぴん」

「おっぴん」

おっぴん



「んんっ♡ふっ♡んあぁ♡♡」

「ニーんな小さいカラダでしょっかり感じちゃって…」

「ロリンジヨ？ちゃんの一族は相当変態みたいだね…」

「ちがうよお♡んっ♡そんなわけない♡♡♡」

「おおっ！出すよっ！
ロリンジヨちゃんの変態マンコにザーメン叩きつけるっ！」



「あんっ♡ほおおっ♡あああっ♡うん♡♡♡」

♡♡♡

♡♡♡

♡♡♡

♡♡♡

♡♡♡

「ふあ……♡んお♡」

「ふーっ……なかなかのおまんこだったよ」

子宮にザーメンがどめどめと押し寄せてくる……♡

この格好で犯されていることに快感を覚えてしまおう……♡

How♡

♡ん♡

♡ん♡

♡ん♡♡

♡♡♡

♡こんな気持ちっ……イケないことなの♡♡♡

翌日以降も私は娼婦として働かされていた……。

「おおっ……やっほ小さい子は締りがいいな」

おっぱい、お尻♡

「ふっ……はあ、はあ……」



「夕々の当たりかなあこれは！おうっおうっ！」

アッ
アッ

アッ

アッ

「はあはっはっおおんっばちゅばちゅくるう……」



「ふうりんあっりんあんのりん」
「おちんちん腫奥まできてるよお」

アッ

アッ

アッ

「だめ、快感に流されちゃー！
せっかくヤッターキングダムまで来たんだから！」

アッ

アッ

アッ



「おいおい、俺のことも忘れなideくれよ」

「ぐえの……んむう」

不意打ち気味の喉奥までおちんちんが突き刺さる。
とっさの出来事にむせ返ってしまう。

「ぐえの……んむう おえの……」

ぐえの

ぐえの

んむう

ぐえの

「おうっ、どうだ兄弟？」

「ここの具合もバツグンだね
卸したてはやっほクオリティ高いわあ……」

「んっんっあっ、おっの……ふへえ」

「よおし！出すぞ出すぞお！」

「零すなよう？ちやーんと飲み込めよお……」

「んっんっ……」

ぬちゅ
ぬちゅ

ぬちゅ

んっんっ
んっんっ

んっんっ
んっんっ

んっんっ

んっんっ



こんな生活にも少しは慣れてきたかな...と思いつ始めた頃

「ふっふっふ」

目の前に現れたおちんちんに思わず目を見開いて驚く。

「なに、この大ききや...?」

「僕はね、ちいさーいおまんこに
ねい込むのがすっごく好きなんだあ...
こうやってね！」



「かあ……はあ、はあ……」

はあ♡

はあ♡

とろろ♡

とろろ♡

私のお腹がポコポコと見たことないカタチへ変形している……！

（いざ……妊婦さんみたいになってるう）

「やっぱり……うやあって奥の奥まで愉しまないとねえ……」

「あかー、ふんふんおっ」

♡♡♡

ぬちゅっ

あかあか
はっはっ

それでも今までの経験の積み重ねか、
このひどい状況を私の身体は快感へ変換してしまうの。



「んっ♡♡んおっ♡♡うおっ♡♡」

ヒッ
ヒッ

ヒッ
ヒッ

おっ♡♡

おっ♡♡



おなかを突き、破りそうな勢いで叩きつけられた精液はひとしきり膣中を泳いだあと、

ぶひゅー...と私のマソコから滝のように溢れだす。

はーっ

あゝ

「はあっはっはっふへっ.....」

「.....おれちやう.....」

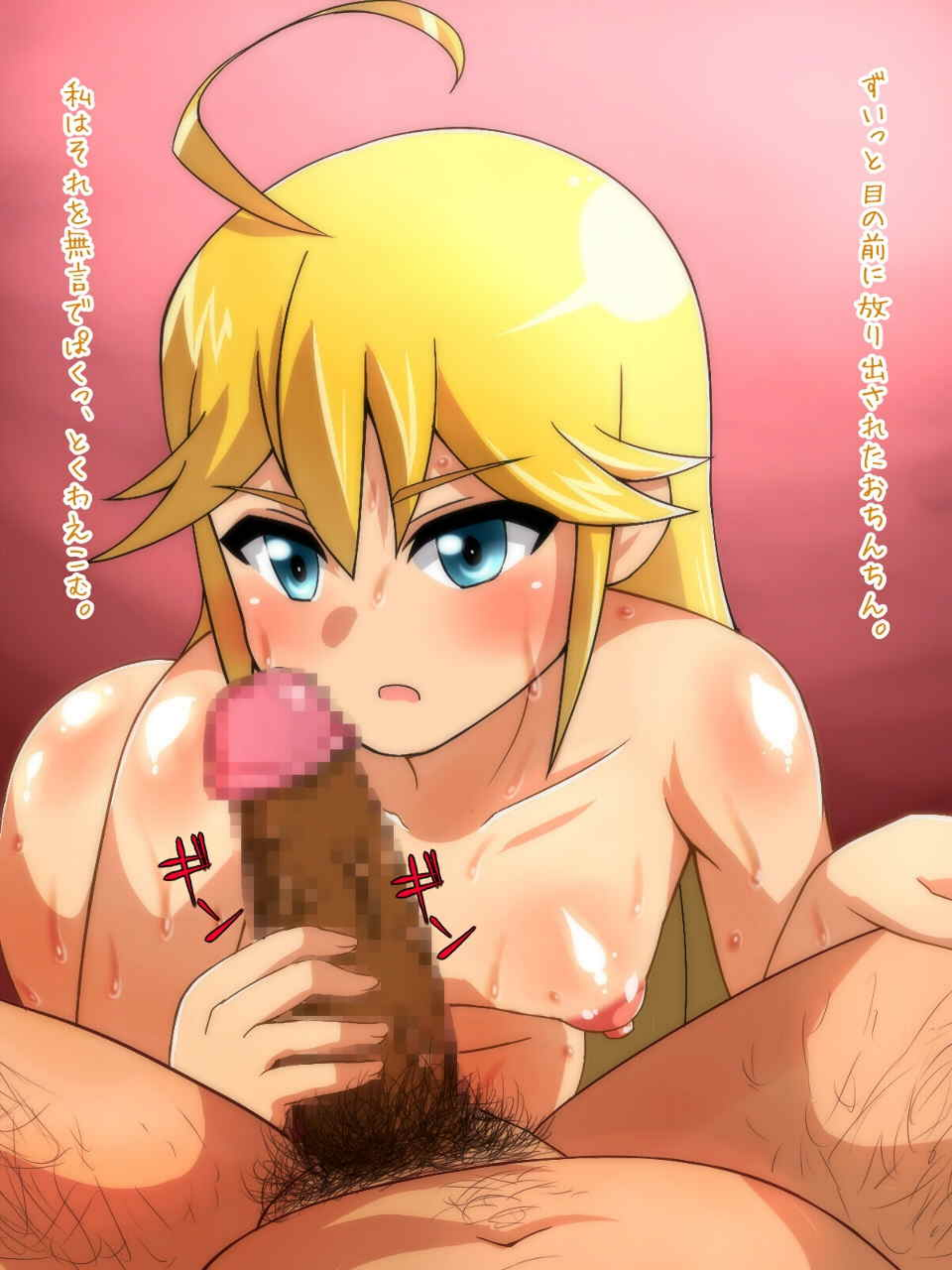
あゝ

How

「ふう、この征服感がたまらないねえ.....」

ずいっと目の前に放り出されたおちんちん。

私はそれを無言でぽくぽくとくわえこむ。



「ちゅるっ……ぬぶぶっ」

自分の体液と男の人の精液が混じったそれを丹念にしゃぶっていく。

♡♡♡

はぁっ♡

「いつつも思うけど……なんか変な味」



「かわいい娘さんが顔を歪ませてフェラしてるのがぐのくとくるねえ」

んふっ♡

んふっ♡

男の人は行為が終わるとだいたいこうしてお掃除させることが多かった。
望まずとも自然に、フェラが上手くなってしまう。





んっ♡

んっ♡

んっ♡♡♡

んっ♡♡

んっ♡♡♡♡

んっ♡♡♡♡♡

立ち上る湯気の中、私は複数の男の人と交わっていた。

♡♡♡

♡♡♡

♡♡♡

♡♡♡

♡♡♡

「んぽおちんちんすっぴいよおちんちんもっとかんかんきまて♡♡♡」

「ここへ来てどれだけの時間が過ぎたのか。もうおからない。」

「このがキもすっかりに染まっちゃったなあ」

「んんん」

「んんん」

「んんん」

「んんん」

「こんな環境でまともな神経を保てるわけないしな」
「性技ばっか上手くなっちゃまって、がキは吸収力がちげーな」



「んっっ♡ぬぶぶっ♡りんふっ♡」

愛しいモノのように一心不乱にしゃぶっていく。

チゅんちゅん♡

んっっ♡

とっくの前に気づいていた。

んっっ♡
んっっ♡...

「ヤッターマン様にチゅんちゅんしに行くより...
セックスしてるほうが気持ちいいし楽しいよお♡」

この快楽を知ってしまった。男の人に犯される喜びを。

生臭いエグい臭いがツンと鼻をつく。

ニコは奴隷の最終処分場の様々な過程を経て使用価値なし、と判断された奴隷はニコへ移送される。

実質ヤッターキングダムへの統治に不満を持つ最下層たちの鬱憤解消の場となっている。



「へへへ、今日は俺が一番乗りみたんだな……」

「ちの……このクソがキ穴がゆるゆるのいやねえか……」

「まあこんな穴ぼこでも自分でするよかあなんぼかマとだな……」

ぬるるる……





「ふー……今回きた奴隷もハズレだな
どいつもこいつもオナホ以下の価値しかねえ」

「あつあつ」

「……………」

「K」
「70」
「mm」
「v」



ここに連れてこられた奴隷は毎日浮浪者などに輪姦され、精液のみを食べて生きてゆく。
餓死してしまってもそれを愉しむ輩もいるようだ。

ヤッターキングがダムはこのシステムにより
治安の確保と犯罪者の有効利用を実現した素晴らしい王国である。

貴方も滞在許可証を取得してヤッターキングがダムに居住しませんか？
安全で快適な夢のような王国がここにあります。

奴



END